

# 新しい価値やツールと、経験・伝統との ベストミックスで「グローバル人材」の育成を目指す

鹿児島県 <sup>かのや</sup>鹿屋市教育委員会 教育長 **中野健作**

なかの・けんさく 鹿児島県の公立中学校教諭を経て、鹿児島県教育庁教職員課課長、鹿児島県総合教育センター所長、鹿児島市立伊敷中学校校長、鹿児島市立吉野公民館館長等を歴任。2015年4月から現職。

## 日本や世界の人たちと 競争・共存する力を育む

子どもたちが生きる未来を考えた時、地域的には、少子高齢化や過疎化などの問題があります。一方、世界的には、経済や科学技術などの分野で国家間が競う「競争」と、環境問題や感染症問題などに国際的に協調して取り組む「共存」が求められます。そのような社会状況を踏まえ、本市では、家庭や地域の教育力を高め、郷土を愛し、協力し合うことによる、「未来を担う心豊かでたくましい人づくり」を教育の基本理念に掲げました。

インターネットの利用で、地方からでも世界とつながりやすくなった今日、本市の子どもにも、日本や世界の人たちと肩を並べて競争・共存するための力が必要です。具体的には、自己実現によって賢く豊かに生きる力や、生涯にわたって学び続け、自らを再教育する力です。多様性を理解して順応する力や、英語をツールとして使いこなしてコミュニケーションする力の育成も重視しています。

次世代の教育は、「主体的・対話的

で深い学び」の実現を目指すことと、GIGAスクール構想によるICTの効果的な活用を推進することに、長年にわたり学校や教員が積み上げてきた経験やノウハウを「ベストミックス」することによって、成り立つのではないのでしょうか。無論それは一朝一夕には実現できず、本市も今まさに試行錯誤を重ねているところです。

## 「寺子屋事業」や「学校応援団」で 地域の方とともに子どもを育成

本市の教育の土台となるのは、「小中一貫教育」と「コミュニティ・スクール」です。その体制により、小・中学校間、地域と学校間の協働を深めています。

本市には元々、地域全体で子どもを育む風土があり、学校と地域には強い結びつきがあります。例えば、2016年度に開始した「鹿屋寺子屋事業」では、子どもが放課後に公民館などに集まり、地域住民から勉強や昔ながらの遊びを教わったり、異年齢で学び合ったりしています。学力向上や放課後の居場所づくりを目的と

した活動で、市内に約30か所ある拠点は今後も増やしていく予定です。

また、地域住民が授業でゲスト講師を務めたり、農業や郷土芸能の体験学習等を支援したりする「学校応援団」は、2020年度には全小・中学校で約2,900回実施され、延べ約8,300人の協力を得ました。地域の方々が学校の大きな力となっていることを、心強く思っています。

「親と子の20分間読書」運動にも力を入れています。毎日、家庭で子どもが本を音読し、読み終えたら保護者が褒めて、親子で本の内容について話し合う活動です。中学生には、読んだ本を親子で紹介し合うことを推奨しています。市民運動のような形で普及させており、家庭の教育力の向上につなげたいと考えています。

## グローバル人材の育成に向け、 小学1年生から英語教育を実施

世界の人々と競争・共存するためにグローバルに課題を捉えた上で、郷土の魅力を生かしてローカルな課題に挑む「グローバル人材の育成」



も目指しています。そのためには、英語をツールとして使いこなす必要があると考え、2005年度より、教育課程特例校として小学1年生からの英語教育を行ってきました。市内を5ブロックに分けて研究を推進し、その成果を市全体で共有することで、小学校英語に関する指導ノウハウが確立しました。

子どもたちには英語学習への前向きな姿勢が育まれています。英語力の伸びを客観的に把握できていない状況でした。そこで、2021年度より、小学6年生全員に英語のパフォーマンステストを実施し、客観的な評価に基づいて授業改善を図る仕組みを整えました。

さらに、小・中9年間で培った英語力を実際に活用できる場を設けようと、小・中学生が地域に住む外国人に英語で本市の魅力を伝え、もてなす「イングリッシュキャンプ」を、子どもたちが主体となって準備から

行う活動にアップデート中です。授業と連続性のある活動とするために小・中学校の英語のカリキュラムも練り直しており、2022年度から実施予定です。

### 学校に年300回以上訪れ、対話による問題解決を重ねる

コロナ禍を通して改めて痛感したのは、直接会って対話することの大切さです。こと教育においては、顔を合わせながら心を通わせて人間関係を構築することが欠かせません。

本市では、不登校の解消に向けて、全市立小・中学校で「構成的グループエンカウンター」\*を教育課程に年間6時間以上組み込み、推進しています。その成果もあり、人間関係や雰囲気が大きく改善されて、ここ数年間で不登校の児童生徒数が3分の2に減少しました。

学校と教育委員会の関係においても、直接対話することを大切にしています。学校に直接訪問するからこそ現状を把握できると考え、指導主事や私自身の学校訪問を精力的に行ってきました。2021年度は1月末までに8人の指導主事が延べ300回以上、市内全小・中学校を訪問しました。一見負担が大きいと感じるかもしれませんが、実際に顔を合わせて話すと、問題解決が早まったり、お互いが納得できる深い結論に達したりしやすく、長期的に見ると利点の方がはるかに多いと考えています。

そうした関係性を土台に、今後も学校と教育委員会が手を取り合って問題解決を図っていく考えです。チャレンジなくして進展はあり得ません。失敗しても軌道修正をすればよいのです。学校と理想の教育を共有し、少しずつ工夫と改善を重ね、子どもにとってよりよい教育を実現していきます。

#### 鹿児島県鹿屋市 プロフィール



◎大隅半島のほぼ中央に位置し、北部には日本の自然百選に選ばれた高隈山系たかくまが連なり、西部は錦江湾きんこうに面する。年間平均気温が17.6℃という温暖な気候と豊かな自然を生かした農業や畜産業が盛んで、名産はさつま芋も黒豚など。第二次世界大戦中に千人を超える多くの特攻隊員が出撃した地であり、鹿屋航空基地史料館がその歴史を伝える。人口 約10万人 面積 448.15km<sup>2</sup> 市立学校数 小学校23校、中学校12校、高校1校 児童生徒数 約1万人 電話 0994-31-1137 (学校教育課)

\* 集団学習体験(エクササイズ)により心の交流の場を意図的に作り出し、本音と本音の交流による親密な人間関係を構築する活動のこと。